
似ている

藍村 泰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
似ている

【Nコード】
N11116K

【作者名】
藍村 泰

【あらすじ】
男子高校生と男の話。嗜好は人それぞれです。

「佐々城、オレとオマエはすごく似ている」

早馬がそう高らかに言い放った瞬間、僕は奴を力の限り殴っていた。

「酷いぞ！ 本当のことを言ったら人は怒るとどこかで聞いたことがあるが、それは本当らしいな……」

「馬鹿が。あんたが気持ちの悪いことを言うから、ついつい手が出てしまったんだよ」

拳がヒリヒリと痛む。少々力任せに殴り過ぎたらしい。僕はよれた学ランの袖を直しながら、早馬はやまに冷たい視線を向けた。この三十路前の親父と知り合いという事実自体、僕は抹消したくて堪らない。彼は見る度に小汚くなっている。無精髭に伸ばしっ放しの髪、浮浪者に間違われそうな身なり。見れば見る程、苛立ちが募る。

僕の心境を察したのだろう。早馬は片方の口角を上げて、悪人らしく嗤った。

「大丈夫。今日は収穫あったから、当分の間、小綺麗な恰好出来るって」

高級そうな女物のバッグを目の前に突き出し、黄ばんだ歯を惜しむことなく見せつける早馬に、思わず溜め息が零れる。彼はここをどこだと思っているのだろう。薄暗い路地裏でも、バーでもない。僕の通っている高校の正門前だ。隙なく辺りを見回せば、クラスメイトである女子達の、大層不安げな目とかち合った。僕は愛想よく彼女達に手を振って見せる。

「心配しないで。この人、道に迷っているみたいなんだ。ちょっと案内してくる」

「え、ええ」

半ば早馬を引きずるようにして、僕は高校を後にした。

「ふざけるなよ、早馬。僕は優等生なんだ。あんたのような奴と知

り合いなんてバレたら面倒だから、高校には来るなど何度口を酸っぱくして言えばわかる？」

「へいへい」

「あんたみたいな真のならず者とはわけが違うんだ。周囲に悪印象を抱かせたくない。社会で生きにくくなるだろう」

「ほーほー」

「……………死んでしまえばいい」

早馬は僕の連なる文句など聞く耳持たず、バッグの中身を漁っている。さっさと金になる物だけ取り出して転売すればいいのに、この男はどんな物でも一々使い道を見つけようとする。こうしてゴミ袋が散乱している狭い道で、彼の行動を見守らなければならぬ僕の身にもなってほしい。生ゴミの臭いで鼻が曲がってしまいそうだ。足を小気味良く鳴らしていると、ねっとりとした黒いヘドロのような物体がローファアの爪先部分についてしまった。最悪だ。

「もう帰る」

短く言い、踵を返した。大体、僕にだってやることがある。それを早馬が手伝ってやると主張したからこそ、こうして見張り役を買って出たが、踏んだり蹴ったりである。

素早くその場を立ち去ろうとした。しかし、僕の帰るという意志は早馬の一言によって呆気なく崩されてしまった。

「うおっ、この女……下着のスペアをバッグに入れてやがった。今日は彼氏とデートだったのか？ 若いのはこれだからなあ」

至極小さなその言葉は、確実に僕の耳を抉った。身を反転させ、早馬を押し退けてバッグを漁る。そこには可愛らしい青いポーチに入った、下着があった。僕の視線はそれに集中する。自分の濁った目が一瞬で煌めいたものに変わったのがわかった。隣にいる早馬は顔を引き攣らせる。

「おいおい、落ち着け。下着は逃げないから。それはオマエにやるから落ち着け」

「うるさい。引ったくり犯は黙って引ったくつとけばいいだろ。僕

は今、下着の検証に忙しいんだ」

早馬は嘆きの吐息を洩らす。

「引ったくり犯に下着愛好家、か。やっぱり血は争えないな」

離れて暮らしていても、とブツブツ独りごちる早馬の向こう脛を激しく強打する。彼はあまりの痛みに悶絶していた。誰だって向こう脛をやられれば声が出ないだろう。

早馬と出会ったのも、こんな薄汚い路地裏だったなと下着を見ながら思いを馳せる。近隣のアパートから盗ってきた下着を恍惚と見ていた僕の横で、当然の如く早馬が座り込んで高級バッグを漁っていた。何という運命の悪戯だろうか。その後、何度か顔を突き合わせ、言葉を交わす仲に至って初めて、僕は早馬が実の父親であるという最悪の真実を知った。早馬も早馬で開いた口が塞がっていなかったが。

「母さん似の造形に毛先まで綺麗な黒髪。パツと見ものすごい美少年なのになあオマエ。中身はオレそっくり。可哀想に、もったいない」

「黙れ」

僕はそう言って、形が損なわれないよう細心の注意を払いながら下着を学生カバンに押し込んだ。

「早馬、認めるよ。僕とあんたは似ている」

骨の髄から腐っている。もう認めるしかない。誰にも理解されないとしても、この性分は更生不能だ。一般人が夢中になるものとは少し――否、かなり違うものを愛する人間だからと開き直るしか道は開かれていない。

僕と早馬は雑踏へと足を踏み出した。彼の歩き方はどう見ても僕と瓜二つで、どこまで似ているんだと叫びたくなった。

「じゃ、またな」

「いつかね」

気のないやり取りを終え、僕達は反対の道を辿る。この中にいれば、異常さが少しでも隠せる気がした。似た趣味を持つ奴がこの人

混みの中に何人もいると思えば、自然と心は躍った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1116k/>

似ている

2010年10月8日15時04分発行